生活の中のオランダタイル

竹多 格　ITARU TAKEDA
（INAXライブミュージアム 主任学芸員）

上──質実剛健な生活の中にも、豪華なタイル張りの暖炉やベッドなどの家具もあった
下──タイルの幅木
（2点とも「世界のタイル博物館」常設展示コーナーより）

左──主題：当時非常に高価だったチューリップ、コーナー：雷文
右──主題：内戦に明け暮れた日々の兵士の姿、コーナー：ユリ文

オランダを代表するやきものの1つに、「デルフト焼」があります。その起源は、16世紀初頭にイタリアの陶工が移住して錫釉（すずゆう）色絵陶器、いわゆる「マジョリカ」を伝え、制作したことから始まります。やがて、東インド会社が中国の染付磁器や日本の色絵磁器をもたらし人気を博しましたが、その後、明王朝時代の政情不安で中国からの輸入が途絶えると、市民の中国趣味の需要に応えるため、白地藍彩の染付陶器の生産が盛んになりました。オランダ各地でこうしたやきものが制作されましたが、その中心地がデルフトでした。その後、「デルフト焼」と呼ばれるようになった白地藍彩陶器は、ヨーロッパ各地に広まっていったのです。

「世界のタイル博物館」では、4番目の展示室に、オランダの市民層に普及し始めた当時のタイル張りの居室を再現しました。その際、参考にしたのがデルフト出身で17世紀の画家、フェルメールの作品「ミルクを注ぐ女」です。そこには、当時、大流行したブルー・アンド・ホワイトのタイルが忠実に表現されています。「ミルクを注ぐ女」に描かれたタイルの幅木は、湿気の多い床近くの壁がシミにならないように張られていました。オランダは、国土が狭いために海を干拓し、海抜0m以下の土地が多く、建物も海際に集中しています。湿気の多い室内で、快適に、清潔に過ごすために、タイル張りが普及したと言われています。当時の市民のつつましやかな生活ぶりを反映するタイル使いではありますが、暖炉周りや台所、地下室、子ども部屋のベッド周りなどにも張られていました。それらのタイルには、日常生活の中で親しみのあるチューリップの花や風車、子ども、市民、兵士、帆船、動物などがユーモラスに描かれています。

再現した居室の暖炉の正面には、17〜18世紀につくられたオリジナルのタイルを使っています。錫釉で白く化粧掛けをし、その上にコバルトブルーの顔料で絵付けしてあります。釉面が剥げ落ちた跡からは淡褐色の素焼きのベースがのぞき、約300年の時代の流れが感じられます。この白化粧掛けの技法は古く、9世紀頃のイラクで考案され、イスラーム文化圏の拡大とともに中近東やヨーロッパに広まっていきました。

油圧プレスで成形し、スプレーで釉掛けする現代の製法と違い、当時の手づくりの温かさが伝わるタイルです。同じ白色の錫釉でも、下地の土色が透けた赤味のあるものから、釉薬がたまって青味のさしたものまであり、形は土をこねてつくり出す手仕事の荒々しさや優しささえも感じられます。工業生産品の画一的な仕上がりを求めてきた反動から、最近では、もう一度このような手づくりタイルを見直す声が、来館者からも多く聞かれます。✱

たけだ・いたる──INAXライブミュージアム 主任学芸員／1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶（現・INAX）入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

「世界のタイル博物館」はINAXライブミュージアム（愛知県常滑市）内にあります。
詳細は、INAXライブミュージアムホームページ（http://www.inax.co.jp/ilm/）をご覧ください。

主題の動物や花だけでなく、コーナーやメダリオンの意匠にも凝ったタイル（「世界のタイル博物館」常設展示コーナーより）